

建学発 2019—第 0008 号
2019 年 2 月 5 日

東京都知事 小 池 百 合 子 様
東京都建設局長 西 倉 鉄 也 様

一般社団法人 日本建築学会
会 長 古 谷 誠 章

葛西臨海水族園の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご尽力を賜り、篤く御礼を申し上げます。

貴下が所有する東京都江戸川区の「葛西臨海水族園の更新に向けた基本構想」が 2019 年 1 月に発表され、新たな水族園の実現に向けた検討が進められている由、うかがっております。基本構想では、現在の水族園地内に、「既存施設とは別に建築する建物に水族園機能を移すことを基本とした検討」を進め、「既存施設については、水族園機能を移設後、施設の状態等を調査の上、そのあり方について検討」すると記されており、現在の建築の建替えの可能性も示唆する内容となっています。

ご承知のように、葛西臨海水族園は上野動物園 100 周年を記念して東京都が計画し、現代日本を代表する建築家の一人である谷口吉生（1937-）の設計により、1989（平成元）年に竣工した建築です。谷口は国内外に多くの美術館建築の名作を設計したことで知られますが、水生生物の展示を目的とするこの施設においても、展示のための機能性と洗練された意匠を兼ね備えた優れた建築を設計し、これまで毎日芸術賞（1990）、建築業協会賞（BCS 賞）（1991）、公共建築賞（1994）を受賞するなど高い評価を受けています。とくに建築へ向かうアプローチの構成や、入念に計画された建築と周辺環境との結びつきはこの建築作品を特徴づけるものであり、そこで試みられた非日常的な空間の演出は、東京の公共建築の中では唯一無二の価値をもつものといえます。現在、文化庁が実施している近現代建築を対象とする文化財調査で示された 7 つの評価基準の内、「革新性」「地域性」「継続性」の三項目に該当する、東京都を代表する近現代建築と評することができます。

展示においても、マグロが回遊する巨大水槽をはじめとした画期的な展示方法が試みられており、従来の水族館の枠に収まらない新しい「水族園」を創出しようとした関係者の姿勢を今なお窺い知ることができます。ここで実践された変化に富む展示空間の設計はその後の日本の水族館の建築に影響を与えたとされ、さらにこの建築が広く市民に親しまれてきたことは、1989 年の開園より多くの入園者を集めてきた事実が示しております。

建設後 30 年近くが経過し、施設・設備の老朽化が進み、バリアフリー等の新たな問題や施設の増改築の要望が出てきていることに対して、長期的な整備の計画が必要であることは論を待ちませんが、しかしながら、竣工後 30 年に満たない優れた建築物を、建替えの可能性を含む検討の対象とすることは、持続可能な発展を目指す今日の社会が求める姿勢とは相容れないものと考えます。それは、多くの市民の記憶が蓄積し、今なお利用者に評価されているかけがえのない建築遺産を失うことに通じるものと危惧しております。

貴下におかれましては、この建物の有する文化的価値について改めてご理解いただき、既存建物の保存活用を考慮した適切な整備・改修計画の策定をご検討下さいますよう、お願い申し上げます。

なお、本会はこの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

2019年2月5日

葛西臨海水族園についての見解

一般社団法人 日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 石田潤一郎

1. 建物の概要

葛西臨海水族園は、上野動物園 100 周年を記念して東京都が計画し、1989（平成元）年に竣工した。敷地は、開発が進む東京湾岸の中で今なお海辺の自然を残す葛西臨海公園内にあり、水族園はその中核的な施設として開館した。東京都の水族館は、1882（明治 15）年に開館した日本最初の水族館である上野動物園内の「観魚室（うおのぞき）」を嚆矢とし、それが形を変えて、1964（昭和 39）年開館の上野水族館に受け継がれていた。葛西臨海水族園は、この歴史ある上野水族館（1992 年に閉館）にかわる東京都の水族館として計画された。なお、「水族園」という名称は、「建物としての水族館という既存の概念すら捨てて考えようという姿勢を示すためにつくられた言葉」（注1）であるという。

設計者は国内外の多くの美術館建築を設計し、美術館建築設計の名手として知られる谷口吉生（1937-）である。地上 3 階建ての建築で、エントランスを 3 階にとり、そこに海を望む屋上の広場と噴水池、そして階下の展示室への入口となる八角形平面のガラスのドームを配置している。1、2 階の展示空間と管理諸施設は直径 100m の円形平面の中に収められ、マグロが回遊する巨大水槽や世界各地の水生生物を展示する水槽群、「渚の生物」を集めた半屋外の擬似自然化された水槽など、変化に富む展示空間が展開する。このような幾何学に基づいた明快な建築の構成、展示・収容のための機能的な建築計画、加えて印象的なアプローチの構成や、入念に計画された周辺環境との結びつきは、谷口の美術館建築の多くに見られる特徴であり、葛西臨海水族園は同氏の設計手法が盛り込まれた代表作の一つと評することができる。同作品は毎日芸術賞（1990）、建築業協会賞（BCS 賞）（1991）、公共建築賞（1994）を受賞するなど、これまで高い評価を受けている。

2. 建物の価値

1) 建築意匠上の価値（現代日本を代表する建築家・谷口吉生の代表作としての価値）

設計者谷口吉生は、1960 年に慶應義塾大学工学部機械工学科を卒業後、ハーバード大学建築学科で建築を学び、帰国後、丹下健三（1913-2005）のもとで都市・建築設計の研鑽を積み、1975 年に自身の設計事務所を設立した。1978 年竣工の資生堂アートハウスを皮切りに、土門拳記念館（1983）、長野県信濃美術館東山魁夷館（1990）、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（1991）、豊田市美術館（1995）、東京国立博物館法隆寺宝物館（1999）、京都国立博物館平成知新館（2014）など、洗練された建築デザインと展示のための機能性を兼ね備えた質の高い美術館建築を発表し続けている。これらの建築作品によって、これまでに日本建築学会賞（1984、2001）、吉田五十八賞（1984）、日本芸術院賞（1987）、村野藤吾賞（1994）

などを受賞している。1997年にはニューヨーク近代美術館改築の国際指名設計競技において10組の建築家の中から設計者に選出され、同美術館新館（2004）の設計を行った。

葛西臨海水族園は、このように国内外で美術館建築設計の手腕が評価されてきた谷口吉生による水族館建築である。建築意匠上の特徴としては、谷口の建築作品に通底する、幾何学形態を基盤とした明快な建築の構成が挙げられる。直径100mの円形平面を建築全体の基本とし、その中に展示や飼育などの複雑な機能を巧みに収めている。最上階では円形の中心に高さ21mの八角形のガラスのドームを配置し、建築の外観を特徴づけると同時に、海へと続く公園内において水族園の存在を示す印象的なランドマークを創り出した。

この建築で特筆すべき点は、建築へ向かうアプローチの構成と、建築と周辺環境との結びつきである。谷口は自作を解説する中で、「単に魚を飼育・展示する施設を目的とするのではなく、建築と周辺の園地を密接に関連させ、海辺の自然を生かした環境を創造することを目的とした」（注2）と記している。来園者はガラスのドームを目指して、プロムナードに沿いながら、臨海公園内を水族園へと近づいていく。入場券売り場のゲートにおいて、ガラスドームは一度視界から消えるが、続く正方形の広場で大階段の先に再び姿を現す。そしてこのドームへ近づいたとき、来園者は水族園の屋上にあたる3階のエントランスの広場にたどりつく。そこからは東京湾の雄大な眺望が開けるのである。

この3階部分は、円形平面の1/4を広場とし、残りの3/4が浅く水を張った噴水池となっている。この池の水面と彼方の東京湾の海面が、広場からは連続して見えるような演出がなされている。海原だけでなく東京や千葉の街並み、そして富士山までもが遠景としてガラスドームを中心とした風景の中に取り込まれ、ひとつの幻想的なランドスケープがここに創り出されている。水族館建築の設計・研究を専門とする安田幸一は、「葛西臨海水族園は、海と一体化した水面から彫刻的なシルエットを見せる新しい水族館建築のプロトタイプとして注目された」（注3）と評するが、水族館という日常から離れた施設のために、周囲の景観を取り込みながら、「非日常性のある空間の演出」（注4）を試みた葛西臨海水族園の建築は、東京の公共建築の中では唯一無二のものと評価できよう。

谷口は自著の中で、この建築の設計に際して「建築、造園、展示から家具、サイン標識にわたるまですべて意匠統一し、総合的に整備された環境とすることを決心した」（注5）と述べている。このような意匠の統一性こそ、葛西臨海水族園の建築作品としての価値を示すものであり、この建築において機能的な更新がなされる場合であっても、建築が当初からもつ周辺環境を含めた意匠的な統一性に最大限の注意が払われることが望まれる。

2) 日本の水族館建築の中での歴史的価値

葛西臨海水族園は、谷口吉生による初めての、また唯一の水族館建築である。水生生物を対象とする新たな展示施設を設計するために、谷口は世界中の水族館を見て回ったという。そして多分野の専門家との協働のもと、前例のない水族館の展示設計を試みている。

水族館の順路は、3階広場のガラスのドームからエスカレーターで2階の展示室へと入場することから始まる。そこを起点に螺旋状の観覧動線が配置されている。趣向を凝らした展示の試みとしては、「水量2,200トン、百数匹ものマグロを含む魚類が群れて回遊する世界で唯一の大水槽、海鳥と魚が同時に観察できる展示水槽、波動装置や潮の干満を起こす

装置を備えた磯を再現した展示など」(注6)が挙げられる。順路の終盤の「東京の海」では、展示水槽の上部に設けられたギャラリーより魚の飼育の様子を観察できるように計画し、視点の変化を用いた展示の工夫もなされている。

このような展示空間の設計については、前出の安田論文において、「90年以降の水族館が、展示手法や建築空間においても格段に質が向上したのは、谷口建築設計研究所が設計した東京都葛西臨海水族園の出現によるところが大きい」(注7)と評価されており、葛西臨海水族園が日本における水族館建築の発展において重要な意義をもつ作品の一つであることがわかる。

谷口はまた、「水族園を都市に生活する大人を対象とした施設として位置づけ、時代を指した新しいレクリエーション施設とすることを考えました」(注8)とも述べている。その思いが東京都民をはじめとした幅広い世代の、多くの人々に受け入れられてきたことは、開館からわずか2年8ヶ月で1,000万人の来観者を数え、1996年までは毎年200万人を超え、近年においても150万人前後で推移する入園者数が示している(注9)。

以上述べたように、葛西臨海水族園は、広く市民に親しまれた文化遺産であると同時に、20世紀後半の東京都を代表する貴重な建築遺産であり、将来にわたって維持されるべき公共建築であると考えられる。開園から30年近くが経過し、施設・設備の老朽化が進み、バリアフリー等の面でも改善が必要とされるが、この建築がもつ文化的・歴史的価値を考慮して、原設計を生かしたかたちで、適切に整備・改修され、保存活用されることが切に望まれる。

<注>

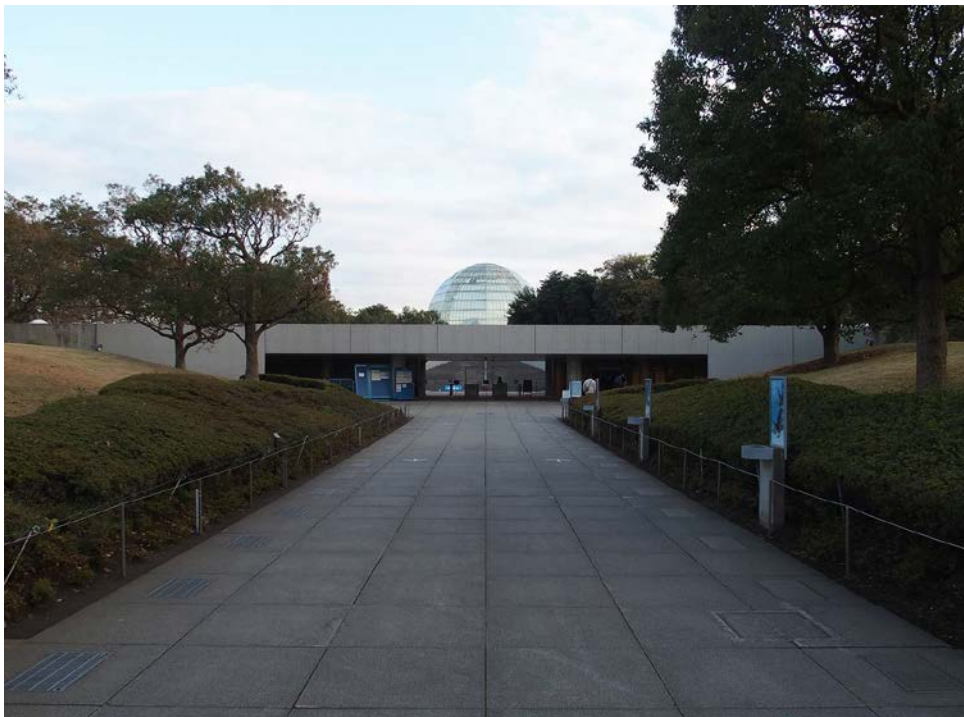
- 注1) 清水政夫編『葛西臨海の公園と水族園』(財)東京都公園協会, 1996年3月, p. 78
注2) 『ja - The Japan Architect 21: YOSHIO TANIGUCHI』新建築社, 1996年3月, p. 146
注3) 安田幸一「水族館の設計法」『建築設計資料 110 水族館』建築資料研究所, 2008年4月, pp. 4-32
注4) 谷口吉生「設計メモ」『新建築』新建築社, 1989年11月, p. 220
注5) 『谷口吉生 建築作品集』淡交社, 1996年10月, p. 264
注6) 谷口吉生「設計メモ」(注4), p. 220
注7) 安田幸一「水族館の設計法」(注3), p. 7
注8) 『建築文化』1989年11月, p. 31
注9) 清水政夫編『葛西臨海の公園と水族園』(注1) p. 131、および「東京都統計年鑑」(<http://www.toukei.metro.tokyo.jp/tnenkan/tn-index.htm>)

<その他の参考文献>

- ・「東京都葛西臨海水族園」『日経アーキテクチュア』1989年10月30日号, pp. 82-95
- ・『谷口吉生のミュージアム』中日新聞社, 2005年
- ・『葛西臨海水族園 20周年記念誌 1989-2009』東京都, 2009年10月



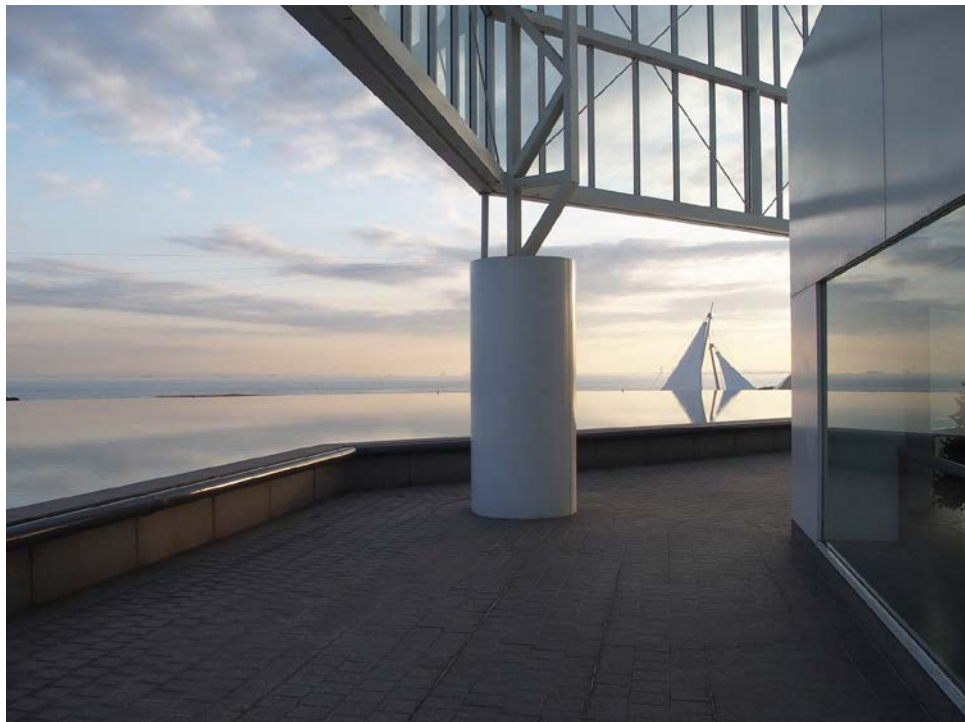
葛西臨海公園と葛西臨海水族園のガラスドーム



葛西臨海水族園へのアプローチ. エントランスのゲートとガラスドーム



3階のエントランスの広場からガラスドームと東京湾を望む



ガラスドームから噴水池と東京湾を望む



エントランスの広場とガラスドーム



エントランスの広場、噴水池とガラスドーム 夜景



マグロが回遊する巨大水槽（アクアシアター）



「東京の海」の水槽上部からの飼育風景の展示

撮影（全ての写真）：海老澤模奈人